

# 文字禍

中島敦

青空文庫



文字の靈れいなどというものが、一体、あるものか、どうか。

アツシリヤ人は無数の精靈を知っている。夜、闇やみの中を跳ちようり  
 梁ようするリル、その雌めすのリリツ、疫えき病びようをふり撒まくナムタル、  
 死者の靈エティンム、誘拐者ゆうかいしやラバス等など、数知れぬ悪あく靈りよう共が  
 アツシリヤの空に充みち満ちている。しかし、文字の精靈について  
 は、まだ誰だれも聞いたことがない。

その頃ころ——というのは、アシュル・バニ・アパル大王の治世第  
 二十年目の頃だが——ニネヴェエの宮きゆうてい廷ていに妙みような噂うわさがあつた。毎  
 夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪あやしい話わし声こゑがするといふ。  
 王兄シヤマシユ・シユム・ウキンの謀叛むほんがバビロンの落城でよう

やく鎮しずまったばかりのこととて、何かまた、不逞ふていの徒の陰謀いんぼうではないかと探つてみたが、それらしい様子もない。どうしても何かの精霊どもの話し声こゑに違ちがいない。最近に王の前で処刑しよけいされたバビロンからの俘囚ふしゆう共の死霊の声だろうという者もあつたが、それが本当でないことは誰にも判わかる。千に余るバビロンの俘囚はことごとく舌を抜ぬいて殺され、その舌を集めたところ、小さな築つきやま山が出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死霊に、しゃべれる訳がない。星ほし占しうや羊肝卜ようかんぼくで空むなしく探索たんさくした後、これはどうしても書物共あるいは文字共の話し声と考えるより外はなくなつた。ただ、文字の霊（というものが在るとして）とはいかなる性質をもつものか、それが皆か目判めくらない。アシユ

ル・バニ・アパル大王は巨眼縮髮きよがんしゆくはつの老博士ナブ・アへ・エリ  
 バを召めして、この未知の精霊についての研究を命じたもうた。

その日以来、ナブ・アへ・エリバ博士は、日ごと問題の図書館  
 (それは、その後二百年にして地下に埋没まいぼつし、更に二千三百年  
 にして偶然ぐうぜん発掘はつくつされる運命をもつものであるが)に通つて万  
 卷の書に目をさらしつゝ研鑽けんざんに耽ふけつた。両河地方では埃エジプト及と  
 違つて紙草パピルスを産しない。人々は、粘土ねんどの板に硬筆こうひつをもつて複  
 雑な楔くさび形がたの符号ふごうを彫りつけておつた。書物は瓦かわらであり、図書  
 館は瀬戸物屋せとものやの倉庫に似ていた。老博士の卓子テーブル(その脚あしには、  
 本物の獅子ししの足が、爪つめさえそのままに使われている)の上には、  
 毎日、累々るいゝたる瓦の山がうずたかく積まれた。それら重量ある

古知識の中から、彼は、文字の靈についての説を見出そうとしたが、無駄であつた。文字はボルシツパなるナブウの神の司りたも<sup>つかさど</sup>う所とより外には何事も記されていないのである。文字に靈ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、<sup>はな</sup>ただ一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した。ト<sup>ほくし</sup>者は羊の肝臓を凝視することによつてすべての事象を直観する。彼もこれに倣つて凝視と静観とによつて真実を見出そうとしたのである。その中に、おかしな事が起つた。一つの文字を長く見詰めている中に、いつしかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを有つことが出来るの

か、どうしても解<sup>わか</sup>らなくなつて来る。老<sup>ろう</sup>儒<sup>じゆ</sup>ナブ・アへ・エリバ  
は、生れて初めてこの不思議な事実を発見して、驚<sup>おどろ</sup>いた。今まで  
七十年の間当然と思つて看過していたことが、決して当然でも必  
然でもない。彼は眼<sup>め</sup>から鱗<sup>こけら</sup>の落ちた思がした。単なるバラバラの  
線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　ここ  
まで思い到<sup>いた</sup>つた時、老博士は躊<sup>ちゆう</sup>躇<sup>うちよ</sup>なく、文字の靈の存在を認  
めた。魂<sup>たましい</sup>によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間で  
はないように、一つの靈がこれを統べるのでなくて、どうして単  
なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか。

この発見を手始めに、今まで知られなかつた文字の靈の性質が  
次第に少しずつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の数

ほど多い、文字の精は野鼠のねずみのように仔こを産んで殖ふえる。

ナブ・アへ・エリバはニネヴェエの街中を歩き廻まわつて、最近に文字を覚えた人々をつかまえては、根気よく一々尋たずねた。文字を知る以前に比べて、何か変つたようなところはないかと。これによつて文字の霊の人間に対する作用はたらきを明らかにしようというのである。さて、こうして、おかしな統計が出来上つた。それによれば、文字を覚えてから急に蝨しらみを捕とるのが下手へたになつた者、眼ほこりに埃ほこりが余計はいるようになった者、今まで良く見えた空の鷲わしの姿が見えなくなつた者、空の色が以前ほど碧あおくなくなつたという者などが、圧倒あつとうてき的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰くイアラスコト、  
猶なお、蛆虫うじむしガ胡桃くるみノ固からキ殻うがヲ穿うがチテ、中ノ実たくみヲ巧たくみニ喰くイツクスガ

如<sup>ごと</sup>シ」と、ナブ・アへ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌<sup>しる</sup>した。  
 文字を覚えて以来、咳<sup>せき</sup>が出始めたという者、くしゃみが出るよう  
 になって困るといふ者、しゃっくりが度々出るようになった者、  
 下痢<sup>げり</sup>するようになった者なども、かなりの数に上る。「文字ノ精  
 八人間ノ鼻・咽喉<sup>のど</sup>・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士はまた  
 誌した。文字を覚えてから、にわかには頭髪<sup>うす</sup>の薄くなつた者もいる。  
 脚の弱くなつた者、手足の顫<sup>ふる</sup>えるようになった者、顎<sup>あご</sup>がはずれ易<sup>やす</sup>  
 くなつた者もいる。しかし、ナブ・アへ・エリバは最後にこう書  
 かねばならなかつた。「文字ノ害タル、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神  
 ヲ痲痺<sup>まひ</sup>セシムルニ至ツテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以前  
 に比べて、職人は腕<sup>うで</sup>が鈍<sup>にぶ</sup>り、戦士は臆<sup>おく</sup>びよう病<sup>びょう</sup>になり、獵<sup>り</sup>師<sup>しう</sup>は獅

子を射損うことが多くなつた。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになってから、女を抱だいても一向楽しゆうなくなつたという訴うえもあつた。もつとも、こう言出したのは、七十歳さいを越こした老人であるから、これは文字のせいではないかも知れぬ。ナブ・アへ・エリバはこう考えた。埃及人は、ある物の影かげを、その物の魂の一部と見み做なしているようだが、文字は、その影のようなものではないのか。

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙ねらい、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱かくようになるのではないか。文字の無むかつた昔かし、ピル・ナピシユチムの洪こ

水うずい以前には、よろこ歡びもちえ智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄ヴェイル被をかぶつた歡びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物もの憶おぼえが悪くなった。これも文字の精の悪いたずら戯である。人々は、もはや、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚が弱ひふく醜みにくくなった。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜みにくくなった。文字が普ふきゆう及して、人々の頭は、もはや、働かなくなつたのである。

ナブ・アへ・エリバは、ある書物狂きようの老人を知っている。その老人は、博学なナブ・アへ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙パピルス草や羊皮紙に誌され

た埃及文字まですらすらと読む。およそ文字になつた古代のこと  
で、彼の知らぬことはない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世  
第何年目の何月何日の天候まで知つてゐる。しかし、今日の天気  
は晴か曇かくもり気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシユを慰  
めた言葉をも諳そらんじてゐる。しかし、息子むすこをなくした隣人りんじんを何  
と言つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダツド・ニラリ王の  
后きさき、サンムラマツトがどんな衣装いしやうを好んだかも知つてゐる。し  
かし、彼自身が今どんな衣服を着ているか、まるで気が付いてい  
ない。何と彼は文字と書物とを愛したのであろう！ 読み、諳んじ、  
愛撫あいぶするだけではあきたらず、それを愛するの余りに、彼は、ギ  
ルガメシユ伝説の最古版の粘土板を嚙碎かみくだき、水に溶とかして飲ん

でしまったことがある。文字の精は彼の眼を容赦なく喰い荒し、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでいたので、彼の鷲形の鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い胼胝が出る。文字の精は、また、彼の脊骨をも蝕み、彼は、臍に顎のくつつきそうな伛偻である。しかし、彼は、恐らく自分が伛偻であることを知らないであろう。伛偻という字なら、彼は、五つの異つた国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・アへ・エリバ博士は、この男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数えた。ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に——全く羨ましいほど——いつも幸福そうに見える。これが不審といえ、不審だったが、ナブ・アへ・エリバは、それも文字の霊の媚

薬のごとき奸猾な魔力のせいと見做した。

たまたまアシウル・バニ・アパル大王が病に罹られた。侍医のアラッド・ナナは、この病軽からずと見て、大王のご衣裳を借り、自らこれをまとうて、アツシリヤ王に扮した。これによつて、死神エレシユキガルの眼を欺き、病を大王から己の身に転じようというのである。この古来の医家の常法に対して、青年の一部には不信の眼を向ける者がある。これは明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあろうものが、あんな子供瞞しの計に欺かれるはずがあるか、と、彼等は言う。碩学ナブ・アヘ・エリバはこれ聞いて厭な顔をした。青年等のごとく、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらおかしな所がある。全身垢まみれの

男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾<sup>かぎ</sup>っているような、そういうおかしな所が。彼等は、神秘の雲の中における人間の地位をわきまえぬのじゃ。老博士は浅<sup>せん</sup>薄<sup>はく</sup>な合理主義を一種の病と考えた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

ある日若い歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシユデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞや？ と。老博士が呆<sup>あき</sup>れた顔をしているのを見て、若い歴史家は説明を加えた。先頃のバビロン王シャマシユ・シユム・ウキンの最<sup>さい</sup>期<sup>き</sup>について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の<sup>ひとつき</sup>一ヶ月ほどの間、絶望の余り、言語に絶した淫<sup>いん</sup>蕩<sup>とう</sup>の生活を送ったとい

うものもあれば、毎日ひたすら潔齋けっさいしてシヤマシユ神いのに祈り続けたというものもある。第一の妃ひただ一人と共に火に入ったという説もあれば、数百の婢妾ひしやうを薪まきの火に投じてから自分も火に入ったという説もある。何しろ文字通り煙けむりになったこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王はそれらの中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じたもうであろう。これはほんの一例だが、歴史とはこれでもいいのであろうか。

賢明けんめいな老博士が沈黙ちんもくを守っているのを見て、若い歴史家は、次のような形に問を変えた。歴史とは、昔、在った事ことが柄らをいうのであろうか？ それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？

獅子狩がりと、獅子狩の浮彫うきぼりとを混同しているような所がこの問の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言えないので、次のように答えた。歴史とは、昔在った事柄で、かつ粘土板に誌しるされたものである。この二つは同じことではないか。

書洩かきもらしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談じょうだんではない、書かれなかつた事は、無かつ

た事じゃ。芽の出ぬ種子たねは、結局初めから無かつたのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ。

若い歴史家は情なさそうな顔をして、指し示された瓦を見た。

それはこの国最大の歴史家ナブ・シャリム・シユ又誌す所のサルゴン王ハルデア征討行せいとうこうの一枚である。話しながら博士の吐はき

棄<sup>す</sup>てた柘榴<sup>ざくろ</sup>の種子がその表面に汚<sup>きた</sup>らしくくつついている。

ボルシツパなる明智の神ナブウの召<sup>め</sup>使<sup>しつか</sup>いたもう文字の精霊共の恐<sup>おそろ</sup>しい力を、イシユデイ・ナブよ、君はまだ知らぬとみえるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉<sup>とら</sup>えて、これを己の姿で現すとすると、その事柄はもはや、不滅<sup>ふめつ</sup>の生命を得るのじや。反対に、文字の精の力ある手に触<sup>ふ</sup>れなかつたものは、いかなるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、なにゆえに存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載<sup>の</sup>せられなかつたからじや。大マルズツク星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒<sup>いかり</sup>が降<sup>くだ</sup>るのも、月輪の上部に蝕<sup>しよく</sup>が現ればフモオル人が禍を

蒙こうむるのも、皆みな、古書に文字として誌されてあればこそじゃ。古代スメリヤ人が馬という獸けものを知らなんだのも、彼等の間に馬という言葉が無かつたからじゃ。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使って書きものをしとるなどと思つたら大間違まちがい。わしらこそ彼等文字の精霊にこき使つかわれる下僕しもべじや。しかし、また、彼等精霊の齎もたらす害も随ずい分ぶんひどい。わしは今それについて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになつたのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、その靈れいの毒氣どつきに中あたつたためであらう。

若い歴史家は妙な顔をして帰つて行つた。老博士はなおしばらく、文字の靈の害毒がいどくがああの有為ゆういな青年をも害そこなおうとしていること

を悲しんだ。文字に親しみ過ぎてかえって文字に疑を抱くことは、決して矛盾むじゆんではない。先日博士は生来の健啖けんたんに任せて羊の炙あぶりにく肉をほとんど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になったことがある。

青年歴史家が帰ってからしばらくして、ふと、ナブ・アへ・エリバは、薄くなつた縮れちぢつ毛の頭を抑おさえて考え込こんだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の霊の威力いりよくを讃美さんびしはせなんだか？ いまいますいことだ、と彼は舌打をした。わしまでが文字の霊にたぶらかされておるわ。

実際、もう大分前から、文字の霊がある恐しい病を老博士の上に齎あづかっていたのである。それは彼が文字の霊の存在を確かめたるた

めに、一つの字を幾日もじつと睨み暮した時以来のことである。その時、今まで一定の意味と音とを有つていたはずの字が、忽こつぜ然んと分解して、単なる直線どもの集りになつてしまつたことは前に言つた通りだが、それ以来、それと同じような現象が、文字以外のあらゆるものについても起るようになった。彼が一軒けんの家をじつと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦れんがと漆しつ喰くいとの意味もない集合に化けてしまふ。これがどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体からだを見ても、その通り。みんな意味の無い奇怪きかいな形をした部分部分に分ぶん析せきされてしまふ。どうして、こんな恰かつ好こうをしたものが、人間として通つていいのか、まるで理解できなくなる。眼に見え

るものばかりではない。人間の日常の営み、すべての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失ってしまった。もはや、人間生活のすべての根柢こんていが疑わしいものに見える。ナブ・アハ・エリバ博士は気が違いそうになって来た。文字の霊の研究をこれ以上続けては、しまいとその霊のために生命をとられてしまうぞと思った。彼は怖こわくなって、早々に研究報告を纏まとめ上げ、これをアシウル・バニ・アパル大王に献けんじた。但ただし、中に、若干の政治的意見を加えたことはもちろんである。武の国アツシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕まれてしまった。しかも、これに気付いている者はほとんど無い。今にして文字への盲目もうもくてきすうはい的崇拜を改めずんば、後に臍ほぞを噬かむとも及およばぬ

であろう云々うんぬん。

文字の霊が、この讒ざん謗ぼう者しやをただで置く訳が無い。ナブ・アヘ・エリバの報告は、いたく大王のご機嫌きげんを損じた。ナブウ神の熱ねつれつさんぎようしやつれつ 烈さんぎな讚さんぎ仰よう者しやで当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、これは当然のことである。老博士は即日そくじつ謹きん慎しんを命ぜられた。大王の幼時からの師し傳ふたるナブ・アヘ・エリバでなかつたら、恐らく、生きながらの皮かわ剥はぎに処せられたであろう。思わぬご不興ふくしに愕がく然ぜんとした博士は、直ちに、これが奸かん譎げつな文字の霊の復ふく讐しうであることを悟さとつた。

しかし、まだこれだけではなかつた。数日後二ネヴェ・アルベラの地方を襲おそつた大地震だいじしんの時、博士は、たまたま自家の書庫の

中にいた。彼の家は古かったので、壁が崩れ書架が倒れた。夥しい書籍が——数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共にこの讒謗者の上に落ちかかり、彼は無慙にも圧死した。

(昭和十七年二月)

## 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」  
ちくま文庫、筑摩書房  
1992（平成4）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一卷」筑摩書房

1987（昭和62）年9月

初出：「文学界」

1942（昭和17）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「古譚」です。

入力：野口英司

校正：野口英司、富田倫生

1997年11月17日公開

2014年1月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 文字禍

中島敦

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>